

台湾の今後を考える

時間が限られているので、今回のテーマに則して私なりの意見を述べてみたい。まず、アメリカのイラク攻撃と中国の立場についてであるが、この重要な問題に対して中華人民共和国は国連安全保障理事会の常任理事国でありながらその責任を十分果たしていない、という問題がある。そこに見えるのは、専ら当面の国際情勢を自らの世界戦略にいかにより有利に運ぼうとするか、という姿勢だけである。イラクとともに危険な要因である北朝鮮の“火遊び”に関しても、社会主義の友邦として責任ある対応を示そうという姿勢は全く見られない。これらのことから、国際社会はまだまだ中華人民共和国を頼りにするわけにはいかない、ということが明白になったと思う。

### 台湾に残された時間は少ない

## 台湾の今後を考える

〈第三十回日華「中国大陸問題」研究会議特別発言〉その一

この間、中華人民共和国は「大国外交志向」を自ら表明し、いかにして二十一世紀の大国になるか、との戦略から今回は非常にずる賢く立ち回った。その一方で中国はこの機会を捉えて、国内の様々な不安定要因、特にウイグル族が掲げる東トルキスタン共和国民族運動を擁護する——「東突恐怖」という言葉が最近『人民日報』によく出てくるが——ために利用しているように見受けられる。従って、アジアの大国である中華人民共和国が国際社会で十分な責任を果たせないということになる、アメリカと日本との日米同盟関係が極めて重要なものになってくる。それに加え、東アジアにおける台湾の国際的役割も極めて重要になってくると思う。つまり、日米同盟関係にプラスして台湾がアジアの安全保障の問題で十分な責任と役割を持つことが期待されているのである。今後、日米関係という大きな基軸に台湾がどのように加わって

中嶋嶺雄  
(国際社会学者、前東京外国語大学学長)

### 視点：中国経済の実像と虚像



第32巻8号

ISSN 0288-7738

2003

5 月号

いくか。これは当然、日台関係のみならず米台関係という大きな国際政治の要因にも関係してくることである。

さて、こうした対外姿勢を見せている中国の国内に目を転じてみると、昨年秋の中国共産党第十六回大会、そしてこの春に行われた第十期全国人民代表大会という二つの政治的セシモノー、あるいは政治的な舞台を通して何が見えてくるのだろうか。そこでは、中国においては政治改革がますます速のいて、いわば世代交代という掛け声にもかかわらず江沢民の軍事独裁が更に強まっている、ということが見てとれる。十六回大会についても、「三つの代表」という中身の無いスローガンを何回も繰り返さなければならなかったし、今度の金人代でも結局、国家中央軍事委員会の主席の座を譲らなかつたという二つの点によっても、そのことは証明されていると思う。

このように依然として独裁体制を続けなければいけない中国であるが、国内には相変わらず様々な矛盾と危機を抱えている。そうした問題は今後ますます深まっていくことになると思われる。しかし、だからこそ、中国の指導者は来るべき二〇〇八年の北京オリンピック、二〇〇九年の三峡ダムの開通、上海・重慶スーパーハイウェイの完成、さらに二〇〇一年の上海万博等々の様々な国家イベントを擁して、それまでは物凄い勢いで国家主義、すなわち大中華民族主義の道を突っ走るのでないだろうか。この二〇〇八〜二〇一〇年あ

たりが今の中国にとって非常にクリティカルな状況になると思う。果たしてそれを乗り切れるかどうか。

ということは、台湾にとっても二度とあるかないかの選択の時期である、ということになる。つまり、それまでに台湾がどのような形で国のあり方を規定していくのか、たとえば憲法改正はあり得るのか、国名変更があり得るのか、またそのことによって台湾がいかにアイデンティティーを固めていくことができるのか、国家アイデンティティー（国家認同）を固めていくことができるのか。こうした問題は、次の総統選挙がどうなるか、また李登輝さんという大きな政治的影響力を持った類まれなリーダーが健在なうちに台湾が次の運命を切り開いていくことができるかどうか、という関頭に立ちとうとしているのではないだろうか。

従って、台湾にとって残された時間はそんなにないと私は思う。この残された時間の中で——これから数年の間に——台湾が大きな決断をすることによって新しい未来を切り開くことができれば、台湾は大陸とは全く別の、日本やアメリカと同じような自由民主の世界として非常に希望が持てるが、しかしその選択が一致団結してできないということになると、これからの二十一世紀の大陸は混沌とする、その大陸の混沌の中に巻き込まれて台湾の未来もまたなくなってしまう可能性がある、と私は思っている。

先ほど「台湾にはそんなに時間は残されていない」と述べ

たが、その理由は二〇〇八年の北京オリンピックまでは大陸が武力で台湾を攻撃してくる可能性は殆どないだろうと考えられるからである。従って、台湾が新しい選択をするなら二〇〇八年のオリンピックの前、ということになろう。オリンピックの前に全世界から批判されるような武力攻撃を大陸が台湾に仕掛けてくる可能性は非常に少ないのではないか。だから、台湾が新しい選択をするのであれば二〇〇八年以前ということになると思う。

### アイデンティティーの確立を

台湾の新しい選択というのは、つまり台湾人としてのアイデンティティーを確立するのか、あるいはそのところを不明確にしたまま現状を維持するのか——ということである。仮に現状維持ということになると、これからの二十一世紀、台湾の人たちはいつも物事がはっきりしないモヤモヤとした、そして国際社会の一員として十分に認知されない、しかし知的にも経済的にも成熟した社会、二千三百万人がそれであり続けることができるかどうか——という問題にかかわってくる。これは台湾の人たち自身の問題だと思ふ。

二十一世紀は市場経済が更に拡大するとともに、ある意味ではデモクラシーというものが非常に重要になるわけだから、もし台湾が徹底的にガラス張りの中で全世界が見ている中で非常に透明度の高い公開の自己選択をした場合には、それを

武力を用いて民意を無視して押えつけないことは許されない、そういう国際環境になるのではないだろうか。従って、そのような選択の可能性は十分あり得ると思う。

そうした選択なしに現状維持ということになると、様々なところでいろいろな問題が起きてくることになる。たとえばいま私が国際事務総長をしているアジア太平洋大学交流機構（UMAP）という国際組織があって学生同士の単位互換を促進したりしているのだが、非加盟国である中国を加盟させて、理事国しかも創立メンバーである台湾の国名を「Chinese Taipei」に変更すべき、という国際的なプレッシャーがこのところ非常に強くなってきている。私自身は国際事務総長として「そんなことは絶対にできない」と言い張っているのだが、そういう大学間や学問の世界にまで問題は及んできている。こうした問題にずっと耐えたまま今後、中華民国・台湾が国際社会の中で生きていけるものかどうか。私は非常に危惧している。

最後にアイデンティティーの問題に少し触れてみたい。日本では「アイデンティティー」という言葉に対して適訳が見つからず、依然としてカタカナ英語を使っている。私も委員の一人を務めている中央教育審議会が先頃、教育基本法改正の最終報告をまとめたが、そこでは「アイデンティティー」という言葉を「日本人であること」と訳し直した。

それに引き換え、台湾の人たちは見事と言ったいいくらい

素晴らしい「認同」という言葉を発見している。アイデンティティーには言語のアイデンティティーもあるし、文化のアイデンティティーもあるし、歴史的なアイデンティティーもあるし、地域的なアイデンティティーもある。勿論、アイデンティティー自身も変容するものである。たとえば台湾の人たちは普通は閩南語を話す。しかし全ての人が閩南語にアイデンティティーを持っているわけではない。北京語を國語とする人もいるし、客家語が母語だという人もいる。それをより鮮明にするということは、国として纏まりがなくなる、あるいは一見対立が深まるように思われるかもしれないが、それを乗り越えて、いわば「台湾人」という新しいアイデンティ

ティーをいま台湾は形成しつつあるのではないだろうか。つまり、台湾はいま変容の過程にあると言ってもいいのではないだろうか。そのように見てくると、これは非常に重要な問題であると思う。

それに対して中国大陸に台湾で言うところの「認同」、つまりアイデンティティーを育て上げるような基盤が果たしてあるかどうか――。私は余くないと思う。そこにあるのはただ一つ、自己中心的な一元的な中華思想があるだけである。この違いは、その国なり社会なりに未来があるかどうかという大きな違いに繋がってくることになる、と私は考えている。どうか台湾の皆様には是非ご検討いただきたい。